

毛  
越  
寺  
の  
祝  
詞

鎌  
倉  
惠  
子

はじめに

一、毛越寺延年の

「祝詞」の様相

二、祝詞と翁面

三、王鼻面

四、白山信仰

五、摩多羅神

おわりに

## はじめに

毛越寺の重要な法会の一つに一月十四日から一週間、僧達が常行堂に籠る常行堂会がある。その結願にあたる一月二十日に行われるのがいわゆる毛越寺の延年である。

その演目の一つに「祝詞」<sup>(1)</sup>がある。これについて本田安次氏は「平泉毛越寺の延年」に「この祝詞が出るまでは堂内の火を使わせなかつた。湯茶も、これが済んだ所で出した。勤行の僧もこの祝詞が済まねば退出が出来なかつたといふ。」と記しておられる。現在でも祝詞は延年演目中でもっとも重要なものであることにかわりはない。<sup>(2)</sup> 本稿では、他の寺院で行われているか、あるいはかつて行われていた延年、または延年に類する行事の祝詞類、別の芸能の名で呼ばれているが、毛越寺延年の祝詞に似ているもの等を比較し、一方では延年がよく催されていた頃、盛んであった白山信仰や、常行堂と深い関わりのある摩多羅神をも視野に入れながら、毛越寺の祝詞が重要視されている理由について、先学の論に導かれつつ探ってみたい。ただし延年については平安時代から室町時代にかけて盛んに行われていたものの、現在伝えている寺院は少なく、また幾多の戦乱で古い資料を焼失しているところがほとんどなので、それに伴う不徹底さが多くあることをお断りしておく。

## 一、毛越寺延年の「祝詞」の様相

「祝詞」の唱者は延年の行われる常行堂別当の大乘院、並びにその分家の僧に限られ、もしいずれかに差し支えのある時は、これを唱えることなく一老が厳封のままの祝詞本を仏前に供える。その内容は口中で呟くため聞き取ることは

出来ない。

唱者の支度は丸い冠に纏が三本立つ三冬の冠、鼻の高い切り顎の翁面、蜜柑色の袍に似た引素絹という衣装に浅葱の切袴、腰に麻糸を下げた桑の弓と蓬の矢をつける。唱者は後見の僧に導かれ、裾を「祝詞」の前に演じた田楽に出た少年に取られて仏前に進む。

仏前で唱者は、常行堂本尊阿弥陀仏の前に供えてあつた捧幣と鳩杖を後見から受取り、右手に捧幣、左手に鳩杖と数珠を持ち、杖を後見に支えながら密奏する。その後、幣をまわし、静かに振つて礼拝し、後見に持ち物を渡して引き下がる。

天明年間（一七八〇年代）にこの祝詞を見た菅江真澄は『かすむこまかた』<sup>(3)</sup>に、

三冬の冠とて、笏のごときものを三ところに立たるそのさま、熱田ノ社の正月ノ十一日のべろべろ祭に、兆鼓ふる  
神人の冠のごときかうぶりをいたゞき、白衣清げに着なし、王の鼻の面をかゞぶりて、左ノ袖に水精の数珠掛  
け鳩ノ杖を衝て、右ギに白幣を持、桑の弓、蓬の箭をおひて祝詞立ながらとなふ、ひめたる事とてつゆも聞えず。

と記しており、この時代の祝詞が現行と同様であることが窺われる。現存する最古の祝詞の詞章は大乗院秀栄伝写のもの（文安六〇一四四九）であるが、唱え方の様相は記されていない。ただこのような一種の儀式は、形式が定まった後は大きな変化はなかつたと考えられる。

本田安次氏は「平泉毛越寺の延年」で「祝詞」について「最後に、（中略）正式には極く特殊な、神秘の足踏がある筈であるが、今はこのことはなく」と記しておられる。大乗院藤里慈亮氏によると、この足踏は祝詞伝授七年目に教える秘伝で、その時になれば見られるそうである。

祝詞の内容は前記大乗院秀栄伝写のものを『延年』<sup>(4)</sup>で読むことが出来る。

それによると常行堂の後ろ戸の神である摩多羅神の本地と利生を説き、御願円満・息災延命・千秋万歳を祝つてい

る。

この詞章で注目したい点は、秘經「常行三昧御本地供」と一部共通した内容を持つことである。「常行三昧御本地供」は延年に先立つ常行三昧の法会中、二老が奥殿の帳内で、内陣の法会とは別に口中で唱えるものである。この中の“敬白”に摩多羅神の本地と「延年」の謂れを説く部分があつてそこに「祝詞」と同様な部分がある。「祝詞」について志羅山頼玄氏は

延年舞の種目に数えられているが、実際は、「御本地供」と同様、最も尊い神秘の式とされ、（中略）いわゆる神式の「御本地供」ともいうべく、内容文脈もほぼその軌を一にしている。（「平泉毛越寺延年と仏教」<sup>(5)</sup>）と記しておられる。「常行三昧御本地供」は手に印を結びながら諸天・諸仏に祈願を込める経であるが、奥殿の帳内で唱えることから、後ろ戸の神摩多羅神のためのものであることは間違いない。そして「祝詞」が重要視されているのも、「常行三昧御本地供」と関係が深く、主な内容が「延年」と摩多羅神に関するからであろう。

さきに「祝詞」に「御本地供」と内容の重複が見られると述べたが、そうでない部分にも注意をはらいたいところがある。

今夜參詣來集聽聞隨喜縉素見物興宴男女面々各々預 摩多羅神之御利生福祐繼須達長者跡寿命等丁令王母齡就中此翁備身相種々之德具行儀品々之用冠甲子高尖支珊瑚之梁袍裙長垂引瑠璃之瓊是則天長地久表万事相應頭戴三冬之雪額置四海之文是亦顯三宝久住四海靜謐之相腰張桑弓是亦表上敬下順禮儀不亂敬屈之相左手提鳩杖以此杖打払八方上下給災難忽消除吉事速來集右手捧鶴毛白妙持此御幣振揚奉再拜諸大小神祇悉以令來臨影向給故兩番一衆此翁以事由令言上給者也謹重啓須奉始摩多羅神今夜降臨影向大小神祇王子眷屬等左男鹿乃八瀧御耳於振立天明爾聞食之嚴志久納受志玉へ夜乃守日乃守不闕時令守護給惠畏礼美畏礼美恐礼美恐礼美天申須土申須

右「祝詞」の引用中、最初から「母齡」までは「延年」は參詣人共々楽しむものであることや、參詣人の利生を述べ

ており、こここの延年の精神をよく表している。その後は「祝詞」唱者の支度の謂れを述べ、続いて祈願となる。後の部分については、唱者が「此翁」と自称している点に注目したい。

前述のように唱者は鼻が高い翁面をつけている。そのため「祝詞」についてはさきの「かすむこまかた」と同様、王鼻面を用いるという説明がよく見受けられる。鼻は確かに王鼻であるが、それを除くと顔の造りは翁であり、「翁」と自称しているのである。それで次に翁面と王鼻面について検討してみたい。

## 二、祝詞と翁面

「翁」というと能の翁を連想するが、ここで対象とするのは世阿弥による猿楽能大成以前の翁と、その名残をとどめていると思われる、民俗芸能の翁である。「翁」については先学の御論がいくつかあり、拙稿もそれに負うところが多い。延年あるいはそれに類する行事に翁面を使用している所は毛越寺以外にもある。その例としてまず小迫（宮城県栗原郡金成町）を挙げてみよう。この地の勝大寺を別当寺としている白山宮の祭（旧三月三日）は現在、延年と呼ばれている。ここには切り顎の翁面をつけた神男と呼ばれる者が、祭文を、周囲に聞こえないように読む演目がある。<sup>(6)</sup> 内容は、十一面観音の功德を讃え、礼拝者の息災延命、各願の聞き届けを願うものである。地域的に平泉にも近く新井恒易氏は平泉からの影響を考えておられる。<sup>(7)</sup> 私もそれについては異論はないが、『金成町の文化財』（その二）に書き留めてある神男の出る頃には「何かと不思議なことがおこり、参詣の人も少なくなるので、（中略）お告を以て浮出した翁面が当山に納めてあつたのをかむつて勤めるようになり、それ以来障りはなくなつた」という、翁面そのものに神秘性を見いだしている勝大寺の言伝えも無視できないと思う。

翁面は兜師と結び付けて論じられることが多い。即ち修正会などの重要な儀式に勤めた兜師は鎌倉時代末期に絶えた

が、それ以前から同じ儀式に同席していた猿樂が、積極的に兜師の芸を取り込み寺社の儀式・祭礼に勤めるようになつた。<sup>(9)</sup> その際いつごろから翁面を使用したのかは不明であるが、鎌倉後期頃、「翁は猿樂座の主要芸であつた」という。<sup>(10)</sup> 多武峰妙楽寺常行堂では本尊摩多羅神<sup>ニ</sup>翁<sup>ト</sup>という説があり、こここの延年三日目にあたる摩多羅神を迎える顯夜には「翁面ヲ持テ來テ下執事ニ授ケ申ス：下執事静ニ翁面ヲアテ、越度モナキヤウニト致祈念」という記録もある。<sup>(11)</sup> 多武峰と同じ天台宗の毛越寺やもと天台宗であつた勝大寺が、祝詞や祭文を重視すれば、翁面を使つた理由もうなづけよう。

平泉にあるもう一つの天台宗の古刹中尊寺ではどうであろうか。ここにはやはり白山社の祭礼に現在延年と呼ばれる行事がある。もつとも中尊寺では古来、延年と呼ばず故実舞と呼ぶが、実体はいわゆる延年であり、鎮守白山神社をワキ正にした能舞台で奉納されている。「祝詞」という演目もあり、この唱者は幣帛を捧げて出たのち足踏みをしてから左膝を立てて座り、祝詞をやはり密奏する。祝詞の内容は大檀那息災・国家豊饒・参詣人利生である。唱者は翁面をつけず、直面に黒い毛を垂らし顔が見えないようにしている。翁面は祝詞直前に唱える開口の者がつける。開口は当山の景色を讃え、中尊寺の謂れを説くもので最後の「万歳樂」は心中で唱える。

「開口」「祝詞」の詞章は秘伝とされ、<sup>(12)</sup> 双方とも重要なものであることを窺わせる。本田安次氏は以前は「開口」の後翁舞を舞つたらしいとしておられるが、私はさらに当山の景色や寺の謂れを説いた後、御利益や願いを唱えて構わないはずであるから、「開口」と「祝詞」はもとは一つであつたのがなんらかの理由で分けられたのではないかと思う。現在、白山宮祭は五月初旬の藤原祭りに行われているが、江戸時代には春の初午の日に行われていた。そしてそれ以前の記録はない。ただこの白山宮祭に出す能の演目は一月七日の白山修正会に決定する習慣なので、もとはこの行事が修正会に關するものであつたことも考えられる。また江戸時代以前から現在のように能舞台で行われていたかどうかは、甚だ疑問である。<sup>(14)</sup> そしてもし修正会のものであつたなら、天台宗修正会に重要視された翁面がもとは「祝詞」に使われていたが、白山宮祭となつて形が変わったのかも知れない。但し前述のように小迫では白山の神を祭りながら「祭文」

に翁面を使い、それをつけることで、白山の神になると考へてゐるようである。しかしその内容は十一面觀音を讀えており、白山信仰、天台宗、翁面に関する伝説の絡み合いがあると思われ、小迫についても検討の余地が大きいにある。

中尊寺と毛越寺の場合、「祝詞」の面の有無、「開口」そのものの有無、延年の期日の相違などは、両寺の拮抗から生じたことも想像される。なお中尊寺の「祝詞」では密奏後、唱者は御幣を舞台に置いてきてしまう。そして後から後見が舞台正面の路地にそれを刺すが、そこは白山宮ではなく、明治天皇の行在所跡なのである。明治以前はおそらく白山宮に奉納したであろう。このように時代によつて形を変えて行く部分もあることを付け加えておく。

ところで、「大成以前の猿樂能の翁舞を考えるための重要な史料」<sup>(15)</sup>である上嶋川住吉神社（兵庫県加東郡）神事舞演目中にある「翁舞」詞章には、

〔心和〕  
ほわ元年かのえさるの御年に（中略）へん勝寺 最勝寺 法勝寺 法成寺 谷の堂 峰の堂 六勝寺<sup>うしろ</sup>の後堂に樂頭集まり 方固め候へて このや翁も 身には打掛 かみは鳥兜を頂き 頬にはぎしやくせんといへる面<sup>おもて</sup>をひき當て君は万歳おはしませと お祝ひ申すばかりなり

とあり、後堂の祭と翁、方固めの関係深さを示してゐる。そして現在もこの翁は謡の最後で、足を交互に上げて達拌を踏むような振りをくりかえす。「翁」について天野文雄氏は平安・鎌倉の今様で構成されているが、天下太平・國家安康を謡う後半は関連歌謡を見いだせないこと、常行堂修正会の行法と関連すること、修正会・修二会に奉仕していた猿楽が、摩多羅神をめぐる行法にふれ、咒師の芸もとり入れつつ摩多羅神や釈迦を形どった翁猿樂という独自の祝禱芸を生み出したことを指摘されざらに「現在のへ翁／には存在しないが、翁の舞が終わつたあと、シテ翁が口の中で『長久円満、息災延命、今日の御祈禱なり』などと唱えるのが本来の形であつた。」と述べておられる。そうであるならば、唱え事中、大切な部分は他に聞こえないようにするのが古い形であり、毛越寺の「祝詞」、小迫の「祭文」、中尊寺の「祝詞」は全文、この形で行われてゐることになる。

天台宗日光輪王寺には現在延年の演目として、「俱舍舞」だけ残されている。しかし「常行堂修正故実草紙」(文禄二年)一五九三以前からは延年に古い猿樂が演じられたことが読み取れ、さらに挙げられているいくつかの演目には、毛越寺の延年の演目と共通点があり、山路興造氏は輪王寺が毛越寺に影響を与えたと考えておられる。<sup>(20)</sup>「常行堂修正故実草紙」によると三日初夜は摩多羅神を迎える頃夜で、この時は他の日に出さない演目即ち「田樂 法人 執千秋樂 老御子」<sup>(21)</sup>が用意される。「法人」はおそらく「のつと」あるいは「のりと」と読むのであろう。そして「執千秋樂」は千秋万歳樂に類することを唱えたのではないだろうか。またこの時、面を使用したことも記されているが、その種類は記されていない。ただ輪王寺には翁面が残されているので、「法人」に使われた可能性はある。

延年とは呼ばれていないが、「水海のあま田樂」(福井県今立郡池田町)の「祝詞」<sup>(22)</sup>は翁面をつけ、左手にチリと称する竹に紙を挟んだものを持ち、田樂の由来、国土安穏、人民慶樂を説くが、最後の「長久円満 千秋万歳 今日の御祈禱なり」の部分は、口伝で他人に聞こえないように唱えることになっている。田樂は猿樂と共に修正会に用いられており、「水海のあま田樂」は現在、鵜甘神社で二月十五日に演じられるが、かつては正月十五日に演じられていた。このあたりは白山信仰圏に入つており、水海の田樂は「白山平泉寺の修正会におこなわれていた田樂・猿樂を学んだ」のではないかという考え方もある。

このように「祝詞」及びそれに類するものに翁面を使用する例は、毛越寺以外にも見られ、歴史を遡ればその数はさらに増えると考えられる。また翁面をつけての足踏みは咒師以来の形式を受け継いだといえるであろう。

翁面をつけたものが特殊なかぶりものを使用する例も散見される。毛越寺と同一なものは見られないが、小迫では丈の高い鳥帽子を被る。さきに挙げた上鶴川の翁舞詞章にある鳥兜も、現行の翁から考えると特殊である。<sup>(23)</sup>三隅治雄氏は「雪祭り」で呪術的所作をする「さいほう」の藁製の先の高く尖った冠について異相とされ、人間以外の他界の靈物を表すと解釈しておられる。<sup>(24)</sup>いくつかの「翁」の特殊なかぶりものもこのような意識を示すものであろう。なお中尊寺の

「祝詞」の顔を覆う毛冠もやはり異相である。近世の節季候は布で顔を覆い、紙の前垂れをしていた。細男も顔を覆う。また「年中行事絵巻」稻荷祭神幸の行列先頭にも馬に乗り白布で顔を覆い鼻高面を胸に下げた人物が描かれている。<sup>(25)</sup> 「祝詞」の唱者を異相にする際、このような顔を覆う形、あるいはシャグマがヒントになったのであろうか。

### 三、王 鼻 面

前述のように毛越寺「祝詞」の面を王鼻面と呼ぶ事は多い。<sup>(26)</sup> ここで王鼻面について考えてみたいと思う。

やはり兜師猿楽の系統である「伊勢猿楽」の記録の一つ「和谷式」に「鼻王ノ面ヲ掛テ方堅メトテ在之。廿一ヶ年メニ社ノ造リ替節、<sup>(27)</sup> 反閉<sup>(28)</sup> 相勤申」という一節がある。詳しい内容は「諸社造宮方堅夜神事執行之次第」<sup>(29)</sup> に、

夜ニ入ト直ニ垢離ヲトリ（中略）ソレドヽ道具相揃（中略）秘文ノ卷ヲヨム。（中略）但シフクメンシテ声タテズ口ノ内ニテヨムナリ（中略）此統反閉<sup>(28)</sup> 之大事（中略）猿田彦ノ面ヲカケル。此面ノ名ハ鼻長トモ王舞トモ鼻高トモ猿田彦トモ云フ。鼻ノ王トモ王之鼻トモ云フ。我等ガ家ニハ阿ト吽ト貳面有。（中略）初阿之面ニテ勤行イ、後吽之面ニテ勤行。四方八方共ニ閑堅者也

とあり、続いて阿吽二面をつけての動作が記され、さらに吽の面をつけて

弓 三段ノ尖リタル矢ヲツガヒテ、左ヘメグリテ、人形ノムネニサシ付テ射ル。コノ次ニ、カリマタノ矢ヲツガヒテ、右ヘメグリテ、矢ノ根ヲ上ニ上テ廻ル。扱丑寅ノ鬼門高ク射テヤル

と弓矢を用いる事が記されている。

毛越寺「祝詞」では弓矢は唱者が身につけているだけであるが、右のような呪術的意味を込めて身につけていると考えられる。

王鼻の面をつけての反閉は現在、北陸地方を中心に見られ、呪師の芸の流れの一端として考えられている。天野文雄氏は『諸社造宮方堅夜神事執行之次第』を始めとする方堅め・呪師の資料から、方堅め用鬼面と翁面が同格として扱わされたことを確認しておられる。<sup>(29)</sup> また新井恒易氏は『諸社造宮方堅夜神事執行之次第』にあるような呪法は、南都寺院でも中世以前から伝えていて、鼻高天狗面になつたのは後であること<sup>(30)</sup>、呪術であった方堅めが田楽・猿楽の芸人によって行われるようになつて芸能化し、仮面が使用されるようになり鎌倉時代には王の舞と呼ばれるものが、田楽・猿楽の次第の始めに行われていることを示された。<sup>(31)</sup>

田辺三郎助氏はこの王の舞の根本義は、「鼻高面の“災払い”ないし“先払い”的性格にあり、」道及び一定の地域を払い清めるはたらきがあり、この場合「方堅」「宝堅」といわれること、「十二世紀末～十三世紀初の頃には、真似るほどの興味の対象として、世に知られた」ことを記しておられる。<sup>(32)</sup> また橋本裕之氏は王の舞が田楽・獅子舞・細男・流鏑馬などといわばワン・セットにされて地方に伝播した例を挙げられ、十五世紀始めには、祭礼芸能としてだけではなく、山村の風流にも取り入れられていたことを示された。<sup>(33)</sup> さきに挙げた上鴨川の神事舞も「王の舞—獅子—田楽を基本セットとする祭礼芸能に翁猿樂が後次的に割り込んだ（中略）可能性が強い」もので橋本氏の論の一例と言えよう。

毛越寺「祝詞」に用いられている面は、古いものではない。面に成立年代は刻まれていないが、近世の作とされてい<sup>(34)</sup>。「祝詞」詞章成立期からこのような面を使用していたのか、後になつて現行の面が新たに使われたのか、不明である。但し、現在見ることの出来ない、秘伝の足踏みを除くと、動きの非常に少ないものであるので、芸能化した王の舞にならない、呪術時代の名残をとどめたものと言えるのではないだろうか。勿論舞の手が欠落し忘れ去られたという見方も出来よう。しかし今日毛越寺で秘儀と言われ特に大事にされている演目があるので、「夜分ひっそり行う方堅め」<sup>(35)</sup>の一種と考えたい。

はない。前者について後藤淑氏は、山伏修験との関係を考えられ、「毛越寺も修験密教と関係深い寺であった。修験道と天狗とが関係の深いところから考えて、あるいはそうした影響を受けたのかもしれない。」と述べておられる。<sup>(38)</sup>しかし呪術がさきに伝えられ、後から王の舞の流行と共に面が入りながら、舞の手は積極的に流用されなかつたと考えられることもできるのではないだろうか。

ところで、毛越寺の「祝詞」は田楽の後に奏されている。しかし本田安次氏によると「この田樂躍は、もとく延年とは別に躍られたものである。伝によると、もと粧坂より躍り始め、大金堂圓隆寺前で奏されたといふ。<sup>(39)</sup>」文安六年前後の書き上げにはすでに「田樂躍 呼立 祝詞」の順に記されている。呼び立は古記録によると「足声」という秘事をおこない、摩多羅神をはやしたあと、一和尚から新人まで呼び上げて「コクヘヤ」に伴うものであるらしい。<sup>(40)</sup>「日光山延年資料」には、三日初夜に毛越寺の「呼立」に対応すると思われる記事が見られる。毛越寺では現在、「呼立」が終わってから田楽になるが、かつては田楽の笛によって始まつたようである。<sup>(41)</sup>このような形はやはり、「呼立」がもともと田楽と関係があつたことを示していると思われる。そして他の地方で田楽と王鼻の関係が深いため、毛越寺でも田楽系の演目に鼻高面をつけた「祝詞」が続くようになつたのかもしれない。但し田楽の後に行われることが、さきに述べたように田楽とセットで流入した王の舞でないことを表しているとも受け取られる。もつとも毛越寺の「祝詞」は田楽系統の者が行う一種の呪術であつた可能性も否定できない。田楽に出た少年が、唱者の裾を持つからである。また介添が支える点などは、上鴨川神事舞の「リヨンサン」で新入りの少年が王の舞の舞手の前にひざまずき舞手の鉾を支えるのに似ている。直接の影響関係とは言えないが、形の似ている点は興味深い。

なお日光山では、田楽、法人の順に行われていたことが、資料によつて判明する。また中尊寺にもかつて田楽があつた。これは江戸時代の記録によれば、「開口」の前に行われている。この順序は中尊寺独自の理由によるのか、毛越寺の影響によるのかは、不明である。そして、小迫は獅子舞、献膳、神男（「祭文」を含む）、入り振り舞、飛作舞、馬乗

渡し、田楽舞の順に行つてゐる。

#### 四、白山信仰

毛越寺には田楽の主要部分の型付けを記した「田楽躍次第記」という記録が二本あり、白山別当家に伝えられている。天台寺院にほとんど白山社があり、<sup>(42)</sup>毛越寺では、正月七日に白山修正会を行つてゐる。中尊寺や小迫の延年は前述のように白山宮の祭りでもある。また「祝詞」に翁面を使用してゐる水海の田楽は、白山平泉寺修正会の名残を伝えたものといわれてゐる。水海のある地域は白山信仰圏の中にある。後藤淑氏は奥州平泉中尊寺・毛越寺の延年芸能と水海の田楽とはその芸能や構成に類似した所があり、「歴史的な関係があつたよう」に思う。<sup>(43)</sup>水海田楽と岐阜県郡上郡白鳥町長滝白山神社の延年の芸能とは関係があつたことが知られる」と述べておられる。「田楽躍次第記」が毛越寺の白山別当家に伝えられているのは、偶然ではなくやはり白山が重要視されていたからといえよう。

後藤氏が述べておられる平泉と水海の関係をもたせたものの一つが、白山信仰と考えられる。白山信仰の広がりについて東国普及は主に「美濃長滝のお師（中略）によつたものであろう。その絶頂期は平安末から鎌倉期<sup>(44)</sup>、「平安末期から鎌倉・室町時代にかけて白山衆徒四千といわれ（中略）いわゆる白山山伏が神宝御厨子を奉じて日本全国津々浦々に行脚」し、<sup>(45)</sup>中尊寺の山も「白山權現の山として土地の人々の尊崇を受けた」という。<sup>(46)</sup>また玉井敬泉氏は白山は航海の神であり、平泉の白山社は慈覚大師の勧請と伝えられ、慈覚大師から三百年後、藤原秀衡が白山信仰で白山頂上に金銅像を寄進したと『白山記』に記載されていることを指摘され、平泉から京へ租米を日本海航路で運ぶため、航海の神として秀衡も白山を信仰したのであろうと述べておられる。<sup>(47)</sup>

このほかに「中尊寺の白山信仰は最上川をさかのぼつて入つたものであろう」「藤原秀衡居城は平泉寺に倣つた」等<sup>(48)</sup><sup>(49)</sup>

の説もある。

秀衡寄進説や居城説は確かめようもないが、このような伝承があること自体、白山と平泉の結び付きの強さを物語つてゐるといえよう。

ともあれ白山信仰が広がる頃、中央の寺院では盛んに延年が催されていた。平泉にいつから延年が始まつたかは、古い資料が消失していく、一四四九年以前に遡れないし、芸態については、江戸時代の資料しか残されていない。しかし白山信仰の伝播と共にそれに関わる芸能も伝わり、「祝詞」の翁にもその片鱗が窺えるのではないだろうか。

さきに挙げた滝波白山神社の幾分鼻の高い面は、もとは加賀白山の別当寺平泉寺の寺宝であった。<sup>(50)</sup>これが毛越寺「祝詞」の鼻高面製作にヒントを与えたのかもしない。

## 五、摩 多 羅 神

ところで「常行三昧御本地供」、「祝詞」に唱えられる摩多羅神であるが、これについてはすでに先学にいくつかの論があり、最近では山田雄司氏の「摩多羅神の系譜」がある。<sup>(51)</sup>これらの論から摩多羅神が常行堂の守護神である事ははつきりしている。山田氏は摩多羅神が芸能と結び付いているのはごく一部であり、従来の研究が安易に翁猿樂に結び付くものが多いことに疑問を発しておられる。しかし常行堂に限れば、摩多羅神に芸能を捧げていることは確かであり、多武峰や日光の記録を見れば、修正会中、摩多羅神を迎える顕夜に限り、特別な芸の奉納をし、あるいは翁面を使用しているのである。

輪王寺では「常行堂修正故実双紙」<sup>(53)</sup>によると、修正会中は勿論、読經発願・調声・咒願もおこなうが、そのほかに、  
經ノ時ニナレハ行道スルトテハ乱舞ノ曲クシテマメクリ 或ハ雜色ヲトコノフナル氣色ヲシテメクリ <sup>(風)</sup>  
(中略) 三已

上正権マテ可様ニクルウ也（中略）修正ノ行法ハ最上ノゾトメナルカ故ニ魔縁ノサマタケヲノカレムトテカヤウニ狂ウ事ニテアル也（中略）三日ヨリコトニクルウヘキ也（狂）  
とあり、摩多羅神を迎える夜は、ことに狂うようにと記される。これは摩多羅神を重要視していることをよく表している。

毛越寺でも摩多羅神を迎える夜—ここでは結願という—「祝詞」を行い特殊の足踏み、即ち方堅めを行う。山路興造氏は

修正会に猿楽系芸能や、田樂躍などが演じられた例は古い。（中略）天台系の大寺院の修正会に「咒師・猿楽」が活躍したことはよく知られる。（中略）本来の咒師芸と違い、一連の翁猿楽の場合は修正会・修二会を行なつている寺院の本尊に対しても演じるのではなく、その守護神や後戸の神として祀られるものに対して演じられるという特色がある。<sup>〔34〕</sup>

と述べておられる。毛越寺の延年は修正会ではなく、常行堂会に行われる。しかしその場で摩多羅神に唱える「祝詞」は翁猿楽の一種とみてよからう。そしてそれぞれの地の守護神である白山に捧げる中尊寺の「開口」・「祝詞」、小迫の「祭文」も形態の類似だけではなく、翁猿楽の流れをくんでいるという点で共通するとみてよいのではないだろうか。

### おわりに

毛越寺「祝詞」は用いる面の形が象徴するように、翁の要素と、王鼻の要素を併せ持っている。両者は方堅めの呪法と関係深いところに共通点がある。常行堂の大切な法会にあたり、その結願の夜を守るためにより力強い形を表すためを作られたのが、鼻高の翁面ではないだろうか。製作が近世初期ということは、翁芸の役割や、王鼻面の役割がすでに

固定していた頃である。現存する面以前に同様な面があつたか否かは不明であるが、少なくとも近世には現存の面で、常行堂会を守つていたのである。摩多羅神に捧げるものとして翁面をつけ唱え事の中で「この翁」と自称しながら、多くの翁芸が採り物としている鈴は持たず、王の舞を思わせる御幣を持つ。この姿がいつごろから始まつたのかは現存の資料からは、窺えない。しかし翁猿樂や王の舞の流行期、さらに白山信仰や、中央の寺院での常行堂での延年の記録が、中世には既にあることから、毛越寺の「祝詞」もその源は少なくとも中世にまで遡れよう。但しそのころ延年の演目は、現在のように一山の僧によつて成されていたのか、遊僧が入つていたのかは不明である。<sup>(35)</sup>

以上のように不備だらけの検討であるが、延年は「祝詞」ひとつとつてみても、遠隔地の呪法や芸能が混ざりあつて成立したことは判明したであろう。今後はより幅広い視野を持っての研究が不可欠なことはいうまでもない。

この稿をまとめるにあたり、毛越寺大乘院藤里慈亮氏、中尊寺菅野澄順氏、小迫延年保存会長千葉彦昭氏に貴重なお話を伺いました。感謝申し上げます。

#### 注

- (1) 『延年』(木耳社)
- (2) 大乘院住職藤里慈亮氏談。
- (3) 『菅江真澄全集』第一巻(未来社)
- (4) 木耳社刊。
- (5) 『講座日本の宗教』第六巻(東京弘文堂)
- (6) 小迫延年保存会長千葉彦昭氏によると、現在は内容をわかりやすくしたものを、マイクで会場に流しているが、かつては聞き取れない程度の声で唱えたとのことである。
- (7) 『続中世芸能の研究』(新説書社)
- (8) 金成町教育委員会。

(9) 山路興造氏「翁猿樂考」(『翁の座』平凡社所収)によると、記録上、修正会に呪師・猿樂が出るのは『小右記』(九八七年)からである。

(10) 天野文雄氏「神としての翁」(『大系日本歴史と芸能』第七卷 平凡社)

(11) 「常行三昧堂儀式」(『延年』所収。)

(12) 『中尊寺史稿』(中尊寺)

(13) 『平泉中尊寺の白山宮祭』(『延年』)

(14) 「祝詞」密奏時の座り方も能の影響かも知れない。

(15) 「播州上鴨川の翁舞」解題(『日本庶民文化史料集成』第二卷 三一書房)

(16) 「上鴨川翁舞詞草」(『日本庶民文化史料集成』第二卷)

(17) 「翁猿樂の成立—常行堂修正会との関連—」(『文学』一九八三、七)

(18) 注(10)と同じ

(19) 『日光山延年史料』(『日本庶民文化史料集成』第二卷)

(20) 「常行堂修正会と芸能」(『翁の座』)

(21) 五日も摩多羅神を迎えるため、三日と同一の演目がある。

(22) 新井恒易氏(『続中世芸能の研究』新読書社)

(23) 『幸正能口伝書』(法政大学能楽研究所編 わんや書店)へ翁猿樂・蘭拍子・神事能故実の項には、多武峰では「ほうゑのまい」に鳥甲を用いたことが記されている。

(24) 『雪祭り』(東京堂出版)総説より。

(25) 同じ絵巻の御靈会に描かれた、白布を顔につけ馬上で腰鼓を打つ男は、中央公論社及び角川版の解説に細男と記されている。  
(26) 小迫の神男の翁面は普通の翁面より鼻がやや高いが、王鼻面とは呼ばれない。滝波白山神社の翁面もやや鼻が高いがこれも田辺三郎助氏の調査によれば、鼻の高さは8センチで王鼻とは呼び難い。

(27) 『伊勢猿樂座記録』(『日本庶民文化史料集成』第二卷)

(28) 『能楽源流考』(岩波書店)所収。

(29) 『翁猿樂の成立と方堅一呪師芸の繼承』(『中世文学』30号) なお天野氏は先の猿田彦II王鼻面を鬼面と称しておられる。

(30) 『中世芸能の研究』(新読書社)

注(7)に同じ。

「鼻高面の系譜」『大系日本歴史と芸能』第七卷 平凡社)

注(32)に同じ。

「王の舞の成立と展開」『芸能史研究』102)

『上鴨川住吉神社の神事舞』(兵庫県加東郡教育委員会)

後藤淑氏『中世仮面の歴史的・民俗学的研究』(多賀出版)

「山城神事芸能資料」解説(『日本庶民文化史料集成』第一巻) なお天野文雄氏も注(29)で挙げた「翁猿楽の成立と方堅一咒師芸の継承」でやはり「方堅は夜間の秘儀で観せるためのものではない呪術」と述べておられる。

『能の形成と世阿弥―中世文化の周辺―』(木耳社)

注(1)に同じ。

注(1)に同じ。

「平泉毛越寺の延年」には田楽の笛で始まるところがあるが、藤里慈亮氏によると現在、この笛はないようである。

五来重氏「布橋大灌頂と白山行事」『白山・立山と北陸修驗道』(名著出版)

『能面 その世界の内と外』(実業之日本社)

注 7 に同じ。

『白鳥町史』通史編下巻(白鳥町教育委員会)

『平泉町史』総説・論説(平泉町史編纂委員会)

『白山の祭神と信仰』(『白山信仰』 雄山閣) また同書の「白山修驗道組織」と題する論の中で、小林一葵氏は『三ツ山巡』(文政六年)に白山長滝寺の「鐘は奥州秀衡寄付の由」という記事のあることを指摘しておられる。

山岸共氏「白山信仰と加賀馬場」(『白山・立山と北陸修驗道』 名著出版)

後藤淑氏が「平泉寺文書」にこのような記事のあることを、『中世仮面の歴史的・民俗学的研究』(多賀出版)で指摘された。応徳年間(一〇八〇年代)より天台宗。戦国時代末期に全山焼亡。後復興。

『中世仮面の歴史的・民俗学的研究』(多賀出版)

『芸能史研究118』

『日本庶民文化史料集成』第二巻(三一書房)

「中世山村における祭祀と芸能―天竜川沿いと越前の領小祠・小堂を中心に―」(『芸能史研究68』)

平泉には、田楽法師屋敷跡と言われるところがある。